

2016年5月・季刊54号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館 松居友



ミンダナオ子ども図書館で
日本政府のODAである

「草の根・人間の安全保障協力事業」
に提案した、カルボガン村の小学校の
建設調印式がコタバトであった。

上の写真は、日本大使と私。

本来は、去年の調印式だったけれど
五月の大統領選挙による

政情の不安定を見越して、

今年の三月に調印式をした後に

選挙後の六月からの建設を予定している。

建設予定の村は、イスラム自治区に属し

この裏のママサパヤでは、

去年の二月に戦闘が起こり

多数の兵士とゲリラが死んだばかりだ。

村に行く道はなく、湿原地帯を

舟で行かなければ到達できない。

写真は、私の友人で

勇猛なコマンダーの前村長さん

けれども身体不随になり、

まだ中学生の息子さんが守っている。

彼は、MCLの奨学生・・・。

村の人たちはみんな

今回の学校建設が決まって大喜びだ。

不安定な要因も多い地域だけれど、

すでに建てた、他の三つの小学校同様に

学校が出来ることにより

村がとても平和になり

住んでいる人たちも明るくなり

青年たちが、武器を持たなくても良い
社会になってくれればと思う。

「草の根・人間の安全保障 無償資金協力」の調印式

松居友

日本政府とイスラム・バンサモロによる、中部ミンダナオへの「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の調印式が、ミンダナオのコタバト市で行われました。マニラからは、日本大使が出席され、バンサモロのイクバル議長、そしてIMT国際停戦監視団の中川氏などが参加されました。

今回は、ミンダナオ子ども図書館が提案した、紛争地域でも北コタバト州側の最も困難で危険度も高いカルボガン集落に小学校の建設が認められ、調



調印式が終わって、大使と私の左が中川氏

印式がありました。カルボガンは、和らに重要な地域であり、イスラム自治州の中でも、舟でしか入れないリグアサン湿原の中に位置しています。

ミンダナオ子ども図書館として活動し始めた時、このあたりは反政府ゲリラの拠点地域として知られ、「危険だから絶対に入らないように！」と忠告された地域です。現在でも、ほとんどのNGOは、容易に入れない地域と言われています。しかし、MCLは、10年以上にわたる絶え間ない支援活動、読み語り、医療、スカラシップ、保育所、戦争避難民救済、そして度々起こる洪水支援（左写真）などをお



洪水の小学校に通う子どもたち。後ろがリグアサン湿原。

して、この地域の住民や村長さん、コマンダーの方々とも連携をとり「子どもたちの救済」を行ってきました。今回の学校建設支援もその一つです。

すでに、現地には保育所を建設し奨学生もいるますが、学校までは建てられません。そこで、学校建設は、日本政府の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」つまりODAに応募することになりました。こうして、すでにナブダス村、ブアラン村に小学校を建て、今回のカルボガンは三棟目。国際停戦監視団の中川さんから提案を依頼されて最近建ったサバカン村の小学校（写真下）を入れると四棟目になります。

ナブダス村は、道もなくゲリラの拠点村でしたし、ブアラン村は、山上のクリスチャンと下のムスリムが40年間対立し殺し合いをしていた場所。これら最も複雑な地域を選んで、今ま



カルボガンのイスラムの青年たちと

で小学校を建ててきましたが、今回のカルボガンはイスラム自治州に属している、しかも湿原内であるがゆえに道もなく、舟でしか行けない、最も困難な場所であるだけに、この小学校が完成すれば、日本の和ら構築にとつては重要な貢献になると思います。

本来は調印式は去年でしたが、選挙を控えて一年延期してもらい、今年の夏あたりから建設を始める予定です。サイトでも少し触れましたが、この地域の支援は、非常に複雑な問題をも抱えており、今後随時この誌上でも報告をしていきたいと思っています。



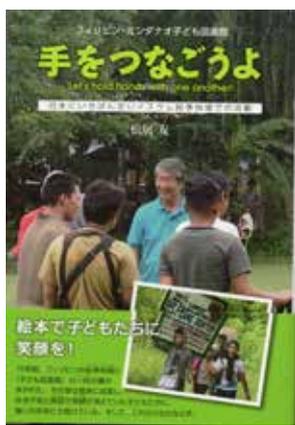
国際停戦監視団の中川氏に問われ、私が企画提案したサバカンの小学校

手をつなごうよ』(彩流社) 執筆動機

著書の印税は、100%ミンダナオ子ども図書館に寄贈しています。買っていたただけで、支援になります。

今回の作品「手をつなごうよ」(彩流社) 定価1800円。副題「フィリピン・ミンダナオ子ども図書館・日本にいちばん近いイスラム紛争地域での活動」は、紛争地域での私の15年間の実体験をまとめたものです。

予期せぬ突然の離婚で、子供たちの将来のために貯めておいた大学までの教育費に加え、家も土地も含めた全財産を「家族のために働いてきたから」と先妻に送り、まったく無一文になった私がいちばん辛かったのは、我が子に会えなくなることだった。その寂しさを、埋めてくれたのが、ミンダナオの親のいない孤児たちでした。



の白い花」(女子パウロ会)に書きましたが、そんななか、イスラム地域に連れて行かれ、その地のイスラムの子ども達の笑顔のない悲惨さを目撃。あまりのひどさから読み聞かせ活動を考案ついたのが子ども図書館の始まりです。

その後、現地の若者たち、特に現在の妻のエープリルリンが中心となり、現地法人資格をとり、日本で言えば高校生ぐらいの若者の力で立ちあがっていったのが、フィリピンの非営利現地法人ミンダナオ子ども図書館でした。

その後、2006年にJICAのトップが緒方貞子さんになってから、IMT国際停戦監視団を通して日本も和平交渉に参加。当時から、国際停戦監視団でもなかなか入れなかった、イスラムゲリラの湿原地帯にも同行し、すでに4棟の小学校建設にも協力。

読み聞かせ活動を中心に、スカラシップはイスラムの戦争孤児や貧困の先住民、崩壊家庭の子供たちを現在600名、大学まで行かせています。また医療では、年間100名ほど、薬から手術まで、そのほか保育所建設、植林をし、和平に貢献。現在は本部には、現地においておけない孤児たちが60人あまり住み込み、衣食住をいっしょにしています。

今回、その実体験を青少年向きに書いた理由は二つあります。

第一に日本の若者たちが訪れるようになって、日本の若者たちのいわば生きがいが見つからず、精神的に引きこもり、自殺など追い詰められた状態が見えてきたことです。

ミンダナオの青少年は、いろいろな問題を抱えているものの、自殺や引きこもりはほとんどありません。特に、貧しい山岳部の先住民やイスラム、クリスチャンのなかにも、互いに助けあう愛と友情が生きているからです。

日本の若者たちが、ミンダナオに来て、子ども達に開かれ泣き。数日たつと生きる喜びと力を得ていく。その姿を見て、ミンダナオでの体験を伝えなければと思うようになりました。

歩けないほどの孤独に落ちこんでいたわたしが、日本人であるにもかかわらず、たった一人で現地の若者たち子供たちと、NGO活動を作っていた喜びを伝えて、青少年に希望を送りたかったことが、執筆の根底にあります。

第二に、現地から見ると、日本自体がアジアのなかで引きこもっているような感じがして、本当の国際化と何か、「上から目線」を放棄して、どういった気持ちで現地の人々の中に溶け込んでいったら良いかなどのヒントを発信できれば、また報道で流されるイスラムと現地の差異、開発によって追われる先住民の状況などを、青少年にもわかる言葉で語り、今後の明るい日本の未来を考えてもらおうと思って作品を書きました。

サイン本が欲しい方は、松居友へ個人宛てにメールをください。

mcltomo@yahoo.co.jp

ミンダナオ子ども図書館は、非営利法人です。個人で対応いたします。

絵本「サンパギータのくびかさり」(今人舎)「わたしの絵本体験」(昔話とこころの自立)「昔話の死と誕生」(教文館)のサイン本もお送りできます。(定価+送料510円)

全ての本の印税は、印税が入り次第、100%ミンダナオ子ども図書館に寄贈しています。養っていかなくてはならない、子供たち、家族です。買っていたただけで、支援になりますのでよろしく願います。



講演会、報告会、家庭集会の以来は、松居友へ

mcltomo@yahoo.co.jp (松居友へメール)

電話番号：080-4423-2998 (日本国内から現地に転送・松居友)
09219603640 (現地携帯電話フィリピン使用・松居友)

わたしの少女時代の

思い出から

松居 エープリルリン

たの？」
五歳になると、母さんがわたしを嫌っているのがよくわかった。母はわたしと目をあわせたくなかったし、わたしが抱きつくと叫んだ。

(これから、妻のエープリルリンが、

「あっちへ、いけ！」

「自分のむすめに何ということをしているの！頭がおかしいんじゃない！」

ど、どこにもいなかった。しかたなく、わたしはひとりステージに立ち、リボンとメダルを受けとった。涙がほおを伝わって流れるのを感じた。

少女時代からミンタナオ子ども図書館に至るまでの、自分の体験を書いていきます。初回は、すでに拙著「手をつなごうよ」(彩流社)に掲載された文の引用ですが、次回からは、季刊誌上で連載させていただきます。松居友)

母がやってくる、わたしは、あえて台所で働いたり、井戸から水をくんだりした。いつもの習慣で母がお酒を飲んだときは、なんの過ちもしていないのに怒鳴られた。母は洗濯女で、父は農夫。

「おきな叫び声に、隣近所のひとたちが、家からでてきた。それを見て、母さんは、わたしを外においたままドアを閉めた。」

家に帰ると、家のなかの様子がおかしくて、そっとカバンとメダルをテーブルにおくと、バケツを持って水くみにいこうときめた。

1985年4月20日、わたしは鬼口で生まれた。5人兄弟姉妹の2番目。わたしが生まれても、母さんは、わたしを自分の子どもと思ってくれなかったし、何の世話もしてくれなかった。おばさんが、めんどろを見てくれただけ。普通とちがう顔で生まれたから、それからあの人生でも、さんざんいじめられて育った。

山から父は、月に1度か2度しか家に帰らず、母はまいにち夜おそく家にもどる、それからあとは飲んでた。小さいころから母さんをよろこばせ、家族を助けるために家事をしたから、料理はしよう。でも、ほかの子たちと遊ぶひまはなかった。わたしたちは、海のおぼにすんでいた。だから、貝をみつけておいしいスープも作った。

その後、おばがわたしを引き取って、数ヶ月そこですごした。そのごも、親戚から親戚へとたらい回しに回されて、一年たつて家へもどった。

その夜、母は弟と妹をつれると家を出ていった。

でも、恥ずかしいとは思わなかった。それどころか鬼口で生まれたことを誇りにおもった。兄弟姉妹のなかでも、ユニークな顔立ちだから、

母さんは、朝早く5時には起きて頭をかかえると「いたい、いたい」とうめいていた。その日、わたしは前日食べた貝のせい、ぜんそくの発作で起きられなかった。

「起きなさい！まだ寝ているの！はやく、起きなさい！」
母さんは、わたしをつかむと、家の入りぐちまで押しやって、外になげだそうとした。わたしは、あわてて、母の服をつかんだ。

姉は祖母のところいき、わたしは、下の妹と残された。その後、父も友だちと仕事をさがしてどこか遠くへ行ってしまった、わたしは下の妹と叔母の家に住むことになった。

しかし、思った以上に人生はきびしく、そう簡単ではなかった。

「起きなさい！まだ寝ているの！はやく、起きなさい！」
母さんは、わたしをつかむと、家の入りぐちまで押しやって、外になげだそうとした。わたしは、あわてて、母の服をつかんだ。

下の妹がわたしを呼んで、人混みのなかをいっしょに両親を探したけれど



すみに捨てられた石が 親石になった

松居友

キダバワンで読み聞かせを始められたのは、ダバオオリエンタルからいっしょについてきてくれた、エープリルリンとレイセルのおかげだった。

とくにエープリルリンは、ひどい鬼口と喘息もちで、小さいころに母親が失踪し、少女時代から山奥の親戚をたらいまわしにされて育った、極貧の少女だった。

少女は朝の4時にはおきて、親戚の家の炊事、洗濯、便所掃除をすませ、ひとり外でご飯のおコゲをほうばったあと、山道をくだって町のちかくの学校に行くのだった。



学校にいつても、唇がさけて前歯がとびだしている姿の少女は、からかいの言葉をあびせかけられた。

彼女はぼくに、ときどき当時の話をきかせてくれた。

「じぶんの顔をからかわれたりしたときはね、そのあと、友だちといっしょに、その子の家のまえにいって、大きな声でいったわ。」

『こんな顔でうまれて、ごめんなさい！』って。」

ひとにからかわれても、いじめられても、勝ち気な少女は嫌な顔一つせずにかんぼった。

少女は、復活祭前夜にうまれた。

ちょうどその夜、教会からイエスの死をつげる鐘の音が聞こえてきたときに生まれたので、エープリルリン（四月の鐘）という名前をあたえられたのだ。父親は、セブ島の方から移民してきた、ピサヤ族。母親は、ダバオオリエンタルという、海に近い半島の山に住んでいる先住民のマンダヤ族だった。こちらの先住民は古くからの習慣で、女性はい4、5歳で親のいこうで結婚させられることがある。彼女の母親もそうだった。

彼女は五人兄弟の二番目だったが、一番下の弟がまだ赤ちゃんのころ、母親は家族をおいて失踪した。エープリ

ルリンが小学校の一年生のころだった。父親は、日雇いの農作業で出かけたまま数ヶ月かえらず、母が子どもたちをおいたまま逃げだしていくときの状況は、いまでもトラウマとなっていて心に悲しい巣をつくっている。

司教館のシスターの宿舎に泊まっていたとき、部屋のなかから、なにやら子猫がいないような声がして、不思議にももつてあけてみると、なんとエープリルリンが寝床にうつぶせになつて泣いているのだった。

驚いてちかよつて横にすわり「どうしたの？」と聞くとだきついて叫んだ。

「おかあさん、おかあさん！」

びっくりした。ぼくのことを、母親だとおもったらしい。おもわず抱きとめると、つぎのしゅんかん、ぼくをつきはなし、両手ではげしく打ちたたきはじめた。「おかあさん！」とさげびながら、ぼくをたたく。

すてられたときのトラウマが、もどつてきているのだなと思つて、手をにぎると、ふとわれにかえつて、ワーワーと泣きだして、抱きついてきた。

まだ、十六歳のころだった。

いま思うと不思議なことだけれど、そんな生い立ちの彼女がいたからこそ、読み語りの活動も、医療活動もおこなうことができたのだ。ぼくは、一

度も彼女を醜いと感じたことはない。

彼女の実家にも行ったことがあるけれども、山の中腹の屋根のはりだしに建ったそまつな竹の小屋で、周囲に家はみあたらない。こちらでは蔑称で「どこでもトイレ」とよばれている竹小屋だった。「どこでもトイレ」とは、便所のない家のことで、おしっこもうんこも外にでて、草むらのどこにでもできる家のことなのだ。

ぼくも、しばしばこの家にとまつて、おじいさんと父親と、四人の姉妹と暮らしたけれども、うんこも外の草むらのなかでして、終わったら葉っぱで尻をふいた。トイレットペーパーなど買えるわけがないので、こちらではうんこはふつう、おしりに水をかけて手でながすか、そのへんの葉っぱでふく。

彼女の家から沢の水場は遠かったし、料理用の水をくみに行くのも急斜面をおりていかなければならないので、水は貴重品だった。

食べものは、よくて山の斜面でそだてたトウモロコシのあらびき。それもなければ、カサバイモだ。家の床も、木ではなく竹でできていて、床下には地鶏が数匹かわれていた。食べのこしは床にこぼすと、竹のすきまからおちて鶏のえきになるのだった。

鶏がいるので、ときどき卵がたべら



れるけれども、屠って鶏肉をたべられるのは、年に一度のクリスマスやお祝いのときだけだ。ナベもなく、大きめの空き缶が、ご飯を炊くための大事な炊事道具だった。

そのようなところで生活した体験は、そのこの活動においても役立つ経験になったとおもう。

さいわい北海道時代に山にはいり、テントはもちろんのこと、山中で寝たりすごしたり、谷をのぼりながらオシヨロコマをつつてたき火で焼いてたべたり、冬には雪洞ですごしたりした体験があったので、葉っぱでおしりの糞をふくぐらひは、どうってこともなかったし、かえって楽しかった。

初めて目にしたときの印象が、いまもせんめいに目にうかぶ。少女は、くりくりした目でぼくをみて、ほほえん

だ。きらきらしたすんだ目だなあ、よい笑顔だなあ、とおもったが、何かがふつうとちがう。上唇が裂けて、2本の歯が飛びだしていたのだ。

兎口だと教えてもらって、なっとくした。手術が終わって、病院からもどつてくると、2本の歯は抜かれ唇は縫製されていた。抜糸のまえだったけれども、部屋ですこし話をした。

うれしかったのだろう、目から涙がこぼれていた。

それから数ヶ月後、ふたたび孤児施設をおとづれると、少女は就労学生をはじめていた。しかし、朝の三時にはおきて食事の用意から豚の餌やり、洗濯、掃除をして、夜は十二時近くに寝る生活は非常にきびしく、都合よく安く家事労働をさせられているようなかんじもした。

しかもひどい喘息もちで、もちろん薬などもかえず、おぼさんはやはり喘息のアレルギーで20代で死んでいることから、彼女も、自分はそのころには死ぬとおもっていた。

のちのちわかってきたことだが、就労学生や女中や子守をさせられた少女が、雇い主にレイプされたあげくに追いだされ、妊娠して子どもを産むケースもおおい。じじつ、ミンダナオ子ども図書館にも、そうした体験をしてき

た少女がけっこういるのだ。話はそれたけれども、再会は、おたがいにうれしかったし、読み語りの活動も再開できた。

それとどうじに、就労学生のおかれている境遇をしりたくて、朝早くおきて、いっしょにトイレの掃除をしたり、食事も外にあるダーティーキッチン、つまりよごれた台所という場所ですこしよにとったりした。

ほんとうに、貧富の格差がはげしい社会で、学業も、大学までいけるのは、20%にもみたくない富裕層の子息たちだけだと言われている。貧しい子たちのばあいは、就労学生になったとしても、よくて高校までがせいぜいで、大学までは夢のまた夢だ。

そんな状況をみて、あるときぼくが、「こういう子たちこそ、大学までいかせてやりたいですね」というと、「極貧の家庭の子たちが大学にいつても、あんまり意味はないですよ。もともとの子生れが、違いすぎますからね。」

この時の言葉はずっと頭に残り、心に刻みこまれていた。そんなわけで、ミンダナオ子ども図書館でスカラシップ支援をはじめるときにはおもった。「こういう子こそ、夢のまた夢の大学までいける、そんなスカラシップを作ろう。そして、食事は、貧しい子ども

もたちと、いっしょの物をいっしょに食べよう。」

そんなわけで、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、極貧の孤児たちでも大学までいけるようにしたし、ぼくも妻も二人の娘も、他の子どもたちと同じ竹の部屋で寝て、同じものをいっしょに食べている。



息子の陽と。息子は結婚して、しっかりと自立の道を歩んでいます。

この文章も、わたしが『手をつなごうよ』（彩流社）に書いた、妻に関する想い出の記述の一部です。原本が欲しい方は、書店やアマゾンでも購入できますが、サイン本が欲しい方は、松居友へ個人宛てにメールをください。ミンダナオ子ども図書館は、非営利法人ですので、個人で対応いたします。定価1800円（送料510円）
 全ての本の著者印税は、全額MCLの子供たちのために寄贈しています。
 メール： mc1tono@yahoo.co.jp

自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。
 郵便振替口座番号 00100 0 18057
 加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

まだ支援者のいない子たちです。ここで紹介されている子は、ほんの一部です。
 小学生の里子支援をご希望の方、下記以外の高校大学生を希望の方は、
 直接メールかFAXでも、推薦ご紹介させていただいています！
 フィリピンには、中学がなく、小学校の後、高校が6年間（ジュニア4年、シニア2年）あります。
メール mc@mindanao@gmail.com (現地日本人スタッフ、宮木あずさ)

Fax 0743 74 6465 (日本窓口、前田容子)

サイトからも検索可能：まだ支援者のない子たちへ！パスワード：mindanao



Roldan D. Tabay

高校4年・1996年生
 マノボ族・クリスチャン
 母親がいない
 将来は教師になりたい



Mark Ryan P. Algofera

高校2年・2001年生
 カオロ族・カトリック
 両親がダバオに出稼ぎに
 出ているため祖父母と暮らす



Analiza Sumandang

高校2年・2001年生
 マノボ族・クリスチャン
 米を買うお金がなく、
 時々三食食べられない



Joteza M. Pableo

高校2年・2002年生
 ビサヤ族・カトリック
 父親を失っており、
 生活は厳しい



Zurmina A. Kusain

高校5年・2000年生
 マギンダナオ族・イスラム
 高校を卒業し
 家族の生活を支えたい
 先生になりたい



Rachel Manib

高校4年・1999年生
 マノボ族・クリスチャン
 家がなく、地主の家に暮
 らしているが
 教育が受けられない



Jessibel B. Tula

高校4年・1999年生
 マノボ族・クリスチャン
 山の貧しい家庭、
 ソーシャルワーカーに
 になりたい



Zanina A. Edris

高校3年2003年生
 マギンダナオ族・イスラム
 9人兄弟の8番目
 戦闘の絶えない地域で
 生活は厳しい成績は良い



Moomen Aliman

大学2年・1996年生
 マギンダナオ族・イスラム
 母でしか到達できない
 イスラムの反政府地域
 6人兄弟の2番目



Norhan A. Dawadi

大学4年・1995年
 マギンダナオ族・イスラム
 家庭は貧しい
 11人兄弟の3番目
 先生になりたい



Omar U. Udas

高校3年・2001年生
 マギンダナオ族・イスラム教
 父親は武装勢力に撃たれ、
 亡くなっている
 クラスで3番目の成績



Omar P. Monib

大学4年・1995年生
 マギンダナオ族・イスラム
 家庭は貧しい
 9人兄弟の8番目
 教育学に通う

7

振込用紙に、支援したい子の名前を書いて
 一部振り込んでいただければ、こちらからご連絡いたします。
 スカラシップ支援希望と書かれている場合は、本部から推薦させていただきます。
 郵便振替口座番号 00100 0 18057
 加入者名「ミンダナオ子ども図書館」

満月の夜に 宮木 梓

停電の夜は明るく感じます。

夜の帳がふわりと降りてきました。二月の乾いた夜空に一番星が小さくピカリと光ります。寒い澄んだ季節に昇るとばかり思っていたオリオン座のりぼんと三ツ星が、ミンダナオの夏の空に浮かびます。

晩ごはんが済んでも電線は仕事をする様子がなく、寝てしまうには美しい夜です。月明りの下、踊るように駆けまわり転がっている子どもたちを眺めています。そうしているとまるで月の子どもたちのようです。

部屋に早く入りなさい、と叱るのは、いつとき待つてくさいね。セカンドハウスからはギターの音がこぼれ落ちています。手元が見えなくても弾けるのです。サードハウスからは、小学



生の女の子たちの元気な歌声が響いてきます。さあ、この素敵な満月の一夜をどう過ごしましょうか。

メインハウスのポーチに女の子たちが丸くなって座っています。どうやら、お話が始まるようです。17歳のマノボの女の子が今晚の語り手です。私たちも聴かせてもらいましょう。

…むかしむかし、ジャンという男の子がいたの。

早くに両親を亡くし、叔父さんと叔母さんに引き取られたのだけれど、つい暮らして、どんなに必死で働いても彼らは一緒にご飯を食べてはくれず、時々ふたれた。

ジャンは棒切れを拾ってきて、テールブルの下に落ちてきた食べこぼしを集めて食べていたが、ついに森に逃げることを決めた。

家を出たものの泣きながら森をさまよっていると、一つ目の巨人が目の前に現れた。

「助けて！助けて！」ジャンは精一杯叫んだが、森の奥深くで誰にもその声は届かずついに転んでしまう。恐ろしさに叫びながら巨人に食べられるのを待ったが、様子が変だ。

ジャンはそっと目を開けまわりを見渡して、もう一度叫び声をあげた。今

度は二つ目の巨人が傍に立っていたのだ。

「怖がらなくてもよい！私はお前を喰いはしない。悲鳴を聴いて助けようと思つて来たのだ。お前を喰おうとした一つ目は私が倒した」

二つ目の巨人はジャンを大きな大きな樹に連れていった。樹の内側は宮殿のように素敵な家だった。巨人はジャンを息子のように愛し、二人は楽しく幸せに暮らしたそうよ…

「この話には続きがあってね、ジャンは実は王子なの。そして恋をするのよ」

…ジャンはあれから巨人と一緒に森の中の大きな樹に住んでいたの。巨人がたった一人の家族だった。

ある日ジャンは森の奥に出かけて行き、ふと虫の家族を見ていった。「お前たちはいいね、両親がそろっていて。僕には母がないし、父上だつて僕とは似ていない巨人なんだ」ジャンはやつぱり寂しかったのね。

森の中を進んで行くとい頭の黒い駿馬がいた。馬はジャンを見ると激しくいなないて、こちらへ向かってきた。

ジャンは驚いて逃げるうち崖から落ちてしまったが、運よく樹の根をつかんでぶら下がっていた。

すると崖の上からきれいな少女が現

れ、ジャンを引き上げてくれた。少女の傍らにはあの馬がいた。「ありがとう。危うく崖下に落ちるところだった」「私こそお礼を言わせてください。森で迷っていたけれど戻る道が見つかったの」少女は馬に乗りながら言った。

「どこから来たの？」尋ねると、少女は村まで案内してくれた。「素敵なところだね」迎りを見渡しながらジャンが言う間に、少女と馬はいなくなつてしまったので、ジャンも大きな樹に戻った。

もうすぐ戴冠式がある。二つ目の巨人は小人をたくさん雇い、ジャンのための新しい宮殿を建てた。

戴冠式の日、たくさんの人々がお祝いにやつて来た。その中には隣国の王と姫君の姿もあった。「皆さま、私たちの王子を紹介します。さあ、戴冠式の始まりです…」人々が盛大に拍手をし、ジャンは王冠を頭に受けた。

ジャンが隣国の姫君とダンスをしていると見知った姿があった。仮面をつけているがきつと森で出会ったあの少女だ。ジャンは少しもダンスに集中できなかった。

パーティーは夜になつても終わらず、ジャンは休みに庭に出た。そこに、少女の姿を見つけて「こんばんは」と声をかけたけれど彼女は気付かない。



もう一度「どうしてここに一人であらうっしやるのですか」と尋ねた。「風が涼しくて気持ちがいいのです」少女がやっと振り向いた。

「お名前を教えてください」ジリン
「以前にお会いしましたね」「あ！あなたは崖から落ちた…」少女はフフッと笑いジヤンも一緒に笑った。

少女が帰る時間になるまで二人はたくさんの話をした。ジヤンは少女に再会した嬉しさでなかなか寝付けなかった。

次の朝、ジヤンとジリンはたくさんの子どもたちを連れて満つぽに泳ぎに行った。二人は水遊びに夢中になって、姫君の家来が見ていることに気付かなかった。

二人のことを知って嫉妬した姫君は、家来にジヤンの新しい宮殿を壊すように命じ「かわいそうなジヤン！ごめんさいね！」と高笑いした。ジヤンは水浴びの後、ジリンの家に招待された。

森の中の家の周りには、たくさんの花々が風に揺られていた。「あなたが植えたのですか」花々を眺めながらジヤンは尋ねた。「小さなころから植物を育てるのが好きなのです」「大きな家ですが、どなたと暮らしていらっしやるのですか」「私一人です。事情があっておばあさまが家を出てからもう何年も戻りません」ジリンは言った。

それから二人は食事をし、ジヤンは宮殿に戻った。宮殿に戻ると、警備の兵士たちが傷ついて倒れ壁には「私と結婚するのよ」という隣国の姫君からの置手紙が残されていた。

ジヤンは、ジリンの家に戻り「父上のところに一緒に来てください」と言った。二人が森の中を急いでいるとき年離れた女性に出会った。とたんジリンが「おばあさま！」と叫んで駆け寄った。少女もジリンをじっと見つめ泣き出した。少女は言った。「ジリン、あなたが本当の姫君なのです。あなたの父は巨人に殺され王の地位を奪われたのです」「その巨人とはだれなの

すか」「隣国の王です」

二つ目の巨人と三人は、偽の王から地位とジリンの宮殿を取り戻す計画を練った。彼らは、ジヤンと隣国の姫君の嘘の結婚式を挙げることにした。姫君はジヤンと結婚することになり有頂天だったが、人々がこの結婚を祝福していないことに気付き、怒って参列者とかみ合いを始めた。「もうたぐさんよ！」姫君は王冠を床に叩き付け、助けを呼んだ。

偽の王は怒り狂い、どんどん大きくなって巨人の姿に変わった。「誰も私を倒せない！誰が相手になる？」その大きな声に人々は震えあがり逃げ出したが、二つ目の巨人だけが「私が相手になるう！」と答えた。

ジヤンと二人の巨人は森に向かった。偽の王が大剣で二つ目の巨人に切りつけようとしたが、ジヤンは剣を奪い、偽の王の背中から切りつけ首を落とすとした。

決闘が終わって、ジヤンたちは宮殿に戻った。「さあ、本当の結婚式を！」ジリンのおばあさんが叫んだ。

それから数年が過ぎた。ジヤンとジリンの間には、ジュンリという名前の子がいた。「ハニー、あなたに見たいものがあるの」ジリンが言った。二人は取り戻したジリンの宮殿に暮ら

していた。ジリンが小さなドアの鍵を開けると、その先のバルコニーにはたくさんの花々が咲いていた。

「愛しているよ、ジリン」彼女を見つめながら、ジヤンは言った。「わたしもよ、ジヤン」ジリンは答え「二人は抱き合った。「どんな困難があっても決して離れ離れにはなりません。二人で乗り越えていきましょう」ジリンは言った。二人は幸せだった。この先も、ずっとずっと…

「ね、どうだった？ジヤンの物語」
「ん、ジヤンは偽の王の頭をちょんぎらなくてもよかったんじゃない？」
「お父さんを殺されて、姫君はどうしたの」

「…どっか行っちゃったのよ」
「MCLに来たんじゃない？」
「まるいお月さまがゆつくり夜空を渡ります。そろそろ眠りましょうか。」



講演会、報告会、家庭集会の以来は、松居友へ

mcltomo@yahoo.co.jp (松居友へメール)

電話番号：080-4423-2998 (日本国内から現地に転送・松居友)
09219603640 (現地携帯電話フィリピン使用・松居友)

野菜売りの少女（連載童話）

姉ちゃん！

田畑の広がる平野をぬけ、谷をわたり、尾根をいくつも横切っていくと、やがて峠から遠くにアポ山が見えた。

「わーっ、アポ山！」

子どもたちが荷台で興奮してさげんでいる。

道は山深くに入っていく。高い木々と巨大なシダの生いしげったジャングルをぬけ、水しぶきを上げて流れている川を車にのったまま、ジャブジャブとわたり、「こんな道ほんとうに通れ



るの？」というような山道をむりやり登っていく。

とちゅう集落をぬけるときは、道ばたで遊んでいた子どもたちがよってきて手をふって叫ぶ。

「わーい、ミンダナオ子ども図書館が来たよ！」

「わたしたち、いろいろな村で読み語りをしたり、医療をしたり、奨学生をとったりしているから、村人たちはミンダナオ子ども図書館の事を知っているのよ」ジサがいった。

「ときには、初めて行く村でも、口コミで噂話が伝わっていてね、大人までかけよってきて手をふってくれるのよ。『ミンダナオ子ども図書館が、この村にもやってきたぞ。ばんざーい！』って」スイーツも言った。

二台の車は、最後の急坂を登り切って、ようやくポアイポアイ村に着いた。

あちらからも、こちらからも、いっせいに村人たちが大喜びで駆けよってきた。見回すとふだん静かな小さな村が、おおさわぎになっている。パパ友とママ・エープリルは、車からおりると、村人たちに状況を聴きはじめた。

たったいま山からだどろついた若者が、興奮したようすで話した。

「この上の山のジャングルでは、今も戦闘がつづいているんだ。激しい撃

ちあいになっている。」

広場を見ると、山から逃げてきた人たちが、とほうに暮れてしゃがみこんでいた。ほとんどが、マノボ族と言われている先住民の人たちだ。着の身着のまま、泥に汚れた服を着て、ほとんどの大人も子どもたちも裸足だ。赤ちゃんを腕に抱いたまま、途方にくれている母親もたくさんいる。

ママ・エープリルがたずねた。

「みなさんは、どこに寝ていらっしやるのですか？」

「どこって、道のわきとか、家の軒下とか、大きな木の下とか」人々は、当惑したように口々にいった。

「それじゃあ、雨がふったら大変でしょう。」

赤ちゃんをだいた女性たちが、とほうに暮れながらいった。

「子どももわたしも濡れになって・・・。」

「病気になるっても、お医者さんにかかったり、薬を買うお金もないし。」

ストリートチルドレンの子たちも、荷台の上からあぜんとして人々を見おろしている。

「ぼくも経験あるけど、道ばたに寝るって大変なんだよなあ。」

山仕事をしている父親たちが、怒りをこめていった。

「いつまで避難しなきゃならないのか。森のなかに植えてきたトウモロコシも、このままじゃ全滅だ！」

「まったく、何を家族に食べさせたらいんだ！」

絶望したように、天に両手をさしだしてさげんだ男もいる。

そのとき、赤ちゃんをだいた女性がさげんだ。

「ギンギン！クリスティン！ジョイジョイ！」

ギンギンたちは、トラックから身おりのりだすとさげんだ。

「姉ちゃんーん！」

「危ない！」

ストリートチルドレンの男の子たちが、ギンギンたちを抱きかかえてトラックの荷台からおろすと、姉ちゃんは赤ちゃんをご主人にわたし妹たちをだきしめた。目に、涙があふれ頬をぬらした。

ママ・エープリルは、子どもたちにかかよるといった。

「ギンギン、クリスティン、ジョイジョイ。よかったね。お姉ちゃんに会えて。」

そのとき、遠くの山のほうから、銃声がかえった。

パンパンパン！

パンパン!

トラックを聞いていた人たちは、おもわず頭をさげた。

「だいじょうぶ、遠くだから。ここまで弾はとんでこないよ。」

「アポイ集落のほうだ。」

「おいてきた山羊たちは、全滅だな。」

頭にバンダナを巻いた男がいった。

「毎年のように戦闘が起こされて、避難民にさせられて、帰ってみれば家畜も畑もメチャクチャ。食べるものもなくとほうにくれていると、土地を買ってやろうという話が、町の金持ちからだされるんだ。」

別の男が、うなずいていった。

「失意のどん底にいるものだから、たいして考えもしないで田畑を安く手放してしまう。あげくのはてに、おれたち先住民は、自分の土地を失って、さらに山の奥に移るか、町に出て浮浪者になる以外になくなるんだ。」

パパ友が、つぶやいた。

「まるでアメリカの西部開拓と、居留地を失っていったアメリカインディアン

の運命と同じ事が、現代でも起こっているんだなあ。」

黒く日焼けした若者がいった。

「山を追われて町に出ても、出生届もなければ、学校教育も受けていないし、字も読めないおれたちを雇ってく

れるところなんてないなあ。」

「こがらだし色も黒いし、髪の毛もチリチリだから、変な目で見られたりもするわ。」

「あげくのはてには、物乞いになるか、子どもたちはストリートチルドレンになるのが落ちなんだ。」

ストリートチルドレンの男の子たちは、首をたてにふつてうなずいている。

杖を持った老人がいった。

「マノボ族は、昔は、この山の下の平地の地味も肥えたところで、畑を耕したり、川で魚をとったりして、貧しいなりに、豊かな生活をしていたんだがなあ。」

スタッフの一人が、トラックの上に立つと大きな声でいった。

「わたしたちが出来ることは、小さな小さな事ですが、ヒナイヒナイバスタカヌナイ、ゆつくりゆつくりたいまなく、皆さんと共に歩んでいきたいと思えます。水牛みたいだね!」

笑いと拍手が、どうじに起こった。

「そんなわけで、とりあえず今日は、日本の人たちから送られてきた、ピニールシートと古着をもってきましたので、受けとってください。」

ワローツという、歓声がわき起こった。

「トラックの前に、一列に並んでい

ただけますか。ピニールシートは、外で寝なければならぬ家族の方々が優先です。古着はたくさんありますから、ボアイボアイの村の方々にも行き渡ると思えますよ。」

パンパンパン

ふたたび遠くで銃声がした。

銃声の後に、ドドーン、ドドーンと、お腹をゆるするような迫撃砲の音もした。下の村から山の上の村に、大砲を撃ちこんでいるのだ。

ミンダナオ子ども図書館のイスラム教徒の男の子がいった。

「ぼくたちのところで起きている戦争にくらべたら、ここの戦闘なんて小さなものだよ。ぼくたちのところだと、無人偵察機もとんで爆弾を落とすし、戦車も走り回るんだ。」

2000年の時のフィリピン政府軍とアメリカ軍の合同演習『バリカタン』のときは100万人の避難民。2002年のアメリカ軍による『テロリスト掃討作戦』の時は、120万人以上の避難民だったんだ。ぼくの父さんも母さんも殺されて、一年半以上も道ばたで避難生活をおくったんだ。」

それを聞いた、若者たちの一人が言った。

「戦争はいやだなあ。」

するとまたスタッフが、良く通る声でいった。

「ピニールシートと古着を受けとつたら、子どもたちは、向こうの大きな木のところに行ってください。鶏肉のはいっただおかゆを食べましょう。炊き出しが終わったら、あちらの木の下で読み語りをします。そのあと、日本から送られてきた、『ゆめポッケ』という贈り物をくばりますよ。中にはね、学用品とぬいぐるみやオモチャもはいっていますよ。」

これには、子どもたちが歓声をあげた。

パンパンパンという銃声とドドーンドンという大砲の音が遠くから聞こえてきたけれど、だれもふり向きもしなかった。

つぶく



Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になるっても治せないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付

直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には年4回、3、5、7、10月に季刊誌『ミンダナオの風』、12月に絵本をお送りしています。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。支援者がまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費、医療費、生活費（MCLは、孤児施設としての許可も得て活動しています）。

MCLや宿舎に住んでいる、子どもたちの食費や生活費、ほぼ250名。

奨学生以外の子どもたちの医療費。戦争の時の緊急支援費。

季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。

不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

2、植林環境支援・・・6万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

3、保育所・下宿小屋建設支援・・・50万円（簡易保育所）80万円（スタンダードまたは総セメント製）

振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年4回の季刊誌と12月には絵本に加え、毎年10月号には現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障。支援には、食費医療費、制服学用品、小遣い、寮下宿代、生活費が入っています。

1、大学生スカラシップ・・・年額70000円（月額5833円）

（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）

2、高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）

振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して本人からの手紙（英語）、5月にスナップ写真、7月に成績表

12月には、絵本といっしょに本人の書いたクリスマス・ニューイヤーカードが届きます。

新規奨学生の紹介は、現地スタッフの宮木梓からプロフィールと写真をお届けします。

文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

3、里子支援（小学生）・・・年額40000円（月額3333円）

振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して、5月にスナップ写真、12月に絵本と本人の書いたクリスマス・ニューイヤーカードが届きます。

新規紹介は、随時プロフィールと写真をお届け。訪問の際は自宅にご案内。プレゼントも可能。

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、

メール mclmindanao@gmail.com（日本人現地スタッフ、宮木梓〈あずさ〉）

Fax 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）

メール：mcltomo@yahoo.co.jp 電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines